【39】

氏　名（本 籍）	西（にし）　一（かず）夫（お）（北　海　道）
学 位 の 種 類	博　　士（文　　学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　2479　号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	文芸・言語研究科
学 位 論 文 題 目	大伴家持論 ―大伴池主との贈答・唱和作品を中心に―

主　査	筑波大学教授		芳　賀　紀　雄
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒　木　正　純
副　査	筑波大学教授		石　埜　敬　子
副　査	筑波大学教授		犬　井　善　壽
副　査	筑波大学教授		向　嶋　成　美

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は，『萬葉集』の掉尾を飾る大伴家持の，越中国守時代の作品を取りあげ，家持をして旺盛な作歌活動に向かわしめたその契機として一般に論及される大伴池主との贈答・唱和に焦点を絞り，綿密な考察を加えたものである。構成の概略は，以下の通り。

序　論　大伴家持研究における問題点

第一章　天平十九年春の贈答―「臥病」作品群―

　第一節　贈答の次第―歌と書簡文―

　第二節　「更贈歌一首」への展開

　第三節　「三月五日」の家持作品

　第四節　「臥病」作品の形成に向けて

　第五節　家持の「臥病」作品群形成

第二章　「萬葉五賦」の形成と家持の上京―池主との贈答・唱和作品―

　第一節　「臥病」作品群から「萬葉五賦」へ

　第二節　「二上山賦」の成立

　第三節　「遊覧布勢水海賦」の唱和

　第四節　「立山賦」の贈和

　第五節　惜別の贈和

第三章　家持と越前遷任後の池主

　第一節　天平十九年の回想と「先書」

　第二節　池主の「来贈歌三首」

　第三節　家持の「報贈歌四首」

　第四節　池主遷任後の家持

第四章　親交の深まりと思慕

　第一節　池主の「来贈戯歌四首」

第二節　家持思慕―「更来贈歌二首」―

第三節　池主の贈るほととぎすの歌

終　論　家持における池主との贈答・唱和の意義

序論では，まず大伴家持研究を概観しその問題点を指摘する。なかで著者は，従来，越中国守時代の家持の，大伴池主との贈答・唱和が，家持の作品の展開において重要な位置を占めるとされつつも，その意義については概括的に触れられるに過ぎなかったことに反省を促す。すなわち，両者の歌の唱和が，中国文学を意欲的に摂取していることはもとよりとして，贈答の方が，書簡文を伴っている点を重視すべきこと，そのうえで歌と書簡文の表現の有機的な関係，書簡文における中国の書儀（書簡の模範文）の受容といった問題を掘り下げることが，家持研究にとって不可欠であると論ずる。加えて，家持の越中国守時代以降の作品を録する『萬葉集』巻十七から巻二十までが，日付に従った配列を意識的に採ることをもって，両者の贈答・唱和の積み重ねの様相が明らかになるとの観点に立ち，その贈答・唱和作品群を一貫させたかたちで捉えうるものとして本論への導入をはかる。

第一章では，家持が越中国守として着任した年の翌天平十九年春，二月二十九日（末日）から三月五日にかけて集中的に行われた池主との贈答について分析を加える。この贈答は，重い病に沈んだ家持が回復に向かった頃，三月三日の遊覧の誘いを池主から受けて断念する旨を書簡にしたためつつ池主に贈った「悲歌二首」と，それに和した池主の作を皮切りに，三月三日当日の家持の「更贈歌」と交錯するかたちで三月四日の池主から家持に贈られた「七言晩春三日遊覧一首并序」と家持の和詩といったように，都合三度にわたったものである。著者は，この全体を，贈答の前に置かれた家持の「悲緒を申ぶる一首」をも含めて，家持が，中国文学において伝統化していたと認められる「臥病」に際しての贈答を意識して構成した「臥病」作品群と捉える。その中国文学への意欲的な接近と相俟って，二度の歌の贈答において，両者それぞれに書簡文を付していることを重視し，この贈答作品群を，家持にとっては，中国文学と向き合う，書簡文をも交えての倭歌の世界を構築して行く新たな試みであったと定位する。

その中国文学に対する強い意識の一つの極として示されたのが，長歌を「賦」と称する例である。同じ年の春から夏にかけて，家持はたて続けに「二上山賦」「布勢の水海に遊覧する賦」「立山賦」をものし，後の二首に対しては池主の和の「賦」が作られ，これら五首を通常「萬葉五賦」と呼ぶ。加えて池主は，「賦」（長歌）に併された短歌を「絶」と称するまで至っており，かかる経緯が先立つ「臥病」作品群を発端としていることを，先学の所説をいっそう深めつつ論じているのが第二章である。そして，この二つの贈答・唱和歌群が，以後の家持と池主の贈答に決定的な意義をもったことを強調している。

第三章では，前二章での考察を前提として，池主が越中国掾から越前国掾に遷任した後の家持との贈答歌群を分析する。天平勝宝元年三月の池主の「来贈歌三首」と家持の「報贈歌四首」である。同じ暮春三月のこの贈答において，越中国で共に過ごした春を，「臥病」作品群を踏まえることで振り返るとする。その一方，両者の国を隔てた親交はさらに深まりを見せたと捉え，この親交が第四章で取りあげられる池主の「来贈戯歌四首」「更来贈歌二首」へと密接にかかわって行くことを仔細に論じている。

第四章。同じ天平勝宝元年の十一月と十二月に池主が贈った作品は，家持によって「来贈戯歌」「更来贈歌」と記し留められ，それは，池主が家持に頼んだ物品とは中身の異なった「針袋」が届いたことに対して，池主が極端に戯れた書簡文と歌をものして家持に贈ったものであった。この二つの作品の間に，家持の注記「右の歌の辺報歌は，脱漏して探り求むることを得ず」があり，この注記については諸説紛糾するが，著者は，家持が池主の戯れを十分に解し，みずからの歌作の脱漏を装って，全体を池主の戯歌で構成しているという新たな解釈を示した。池主の戯れのなかに家持への思慕が通底していると捉え，両者の親交の深まりが看取されるという立場を取るのである。一方，家持の方から池主に贈った作品としては，翌天平勝宝二年四月の「霍公鳥の歌」がある。この長歌は，題詞に「感旧の意に勝へず」と記すこともさりながら，「萬葉五賦」中の池主の和の「賦」の表現を随所に取り込んでいることを指摘して，天平十九年を回想する家持の心情と池主への思慕の情をあらわしているも

のと位置づける。

かくて，越中国守時代の家持が池主を特定して贈答・唱和を重ねた作品が，家持の作歌活動のなかで確たる位置を占めたということを，著者は結論づける。書儀の受容は，たとえば京師の藤原二郎に贈った書簡文を伴わない「挽歌一首」の表現・表記にも認められると著者は論じ，また一方で，天平十九年の池主との集中的な贈答・唱和は，たとえば「越中秀吟」と称される巻十九の巻頭「春苑の桃季の花を眺矚して作る二首」以下の十二首の作品に，その影響を及ぼしていることにも触れる。そして，叙上の書儀にかかわる表現の更なる追究と，家持と池主の贈答・唱和のもつ意味のいっそうの掘り下げの必要性を強調して結ぶ。

審査の結果の要旨

本論文が，大伴家持と大伴池主との贈答・唱和，なかんずく書簡文を伴う贈答作品について，中国の書儀の受容を軸として追究したことは，贈答作品群の解明にあたって，きわめて有効であった。その書儀は，諸家によって当時盛んに作られていたと推定されるにもかかわらず，同時代のものが中国本土でははやく失われ，西域の敦煌・トルファン文書中に伝存するのみで，また海東の日本には「杜家立成雑書要略」が伝わっている程度という状況下にあるだけに，尚更有効だったと認められる。著者は，敦煌・トルファン文書を博捜したうえで，家持と池主の書簡文の形式・表現を解明するという地道な努力を続け，かつ慎重に結論を出している。また著者は，家持と池主の書簡文の形式に文書形式との類同性が認められることをも指摘し，正倉院文書についても隈なく調査しており，その目配りは夥しい木簡類にまで及ぶ。

すなわち，著者は従来の研究から欠落していた文献類の探求とその結果を踏まえて立論しており，第一章・第三章・第四章などの考察は，その分，説得力に富むものとなりえている。のみならず，書簡文と歌の表現の有機的な関係についても，各々の例に即して丹念に掘り下げており，その点でも従来の家持研究を一歩前進せしめたものとして高く評価される。加うるに，第一章で論じた天平十九年春の贈答を契機として，同年夏の「萬葉五賦」における「賦」の唱和へと展開する経緯についても，中国文学の意欲的な摂取という観点から無理なく論じつつ，家持の上京の砌に交わされた惜別の贈答をも含めて両者の集中的な唱和ないし贈答が，池主の越前遷任後の贈答において大きな意義を持ったことを的確に押さえている。その分析が，たとえば第三章における池主の「来贈歌三首」と家持の「報贈歌四首」の解釈に更なる説得力を持たせているなど，総じて，従来統一的な把握のかなわなかった家持と池主との贈答・唱和作品群を一貫して論述した著者の力量は，評価されて然るべきである。

本論文は，叙上のように高い水準を示しているが，書儀に重点を置きすぎたために，家持の作歌における，この書儀を含む中国文学の受容の全体像が，かえって薄らいでしまう憾みが残った。家持の個々の作品について中国文学とのかかわりを指摘する論考は数多く，著者が今後これらの指摘の上に立っていかに全体像を捉え直して行くかが大きな課題となるでしょう。また，書簡文を伴った家持と池主との贈答において，「未だ山柿の門に逕らず」という，古くから議論が重ねられてきた「山柿の門」が，誰をあるいは何を指すかといった問題を，著者の立場から解明しえなかったことも瑕瑾となった。さらに，終論において著者は，「書簡的表現の摂取」の一節を設け，書簡文を伴っていない家持の「挽歌一首」の表記と表現を分析しているが，書儀の受容を柱とする著者の研究が，かかる方面でいかに有効性を発揮しつつ進展して行くかについても今後を俟たなくてはならない。

とは言え，従来の家持研究の大きな空白を埋めた成果は大きく，部分的に発表された論文は，すでに学界の注目するところとなっている。著者が，本論文全体において，家持と池主の贈答・唱和作品群の内包する問題点を改めて提起し，その解明と意義づけをはかったことは，今後の家持研究にとって，ひいては『萬葉集』研究にとっての確かな指標となるものと判断される。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。